中学校・岡山市長賞

関東大震災と夢二

岡山市・芳泉中1年　與曽井　美希さん

滴一滴

竹久夢二はジャーナリストだった。おしゃれな美人画や詩文、商業デザインで「大正ロマン」を体現した花形だったが、その一方で日露戦争批判の風刺漫画のような仕事も残す▼ルポルタージュの腕も買われていたのだろう。100年前のきょう、東京・渋谷で関東大震災に遭った夢二は翌日から焼け跡を歩き回り、都新聞（現・東京新聞）に連載を始めた▼第1回。「道行く人は、何を言うべきかも知らず、黙々として、ただ左側をそろそろと歩いてゆく」。第2回。「浅草観音のおみくじ売り場に群がり、今はただ明日の命を占っている」。絵と文で記録したのは普通の人々だ▼「中でも女性や子ども、社会が抱える弱さに向けた独自の視点を感じませんか」。全21回のパネルを特別展示中の岡山市・夢二郷土美術館を、学芸員の平松里美さんと巡った▼朝鮮半島出身の人たちが暴徒化したとのデマに踊らされる大人をまね、自警団ごっこをする少年らを描いて「やめましょう」と説く。生きるために数本のたばこを売る娘を見て、それを売り尽くした後、欲深い大人たちが勧めるであろう事を憂える▼使命感に駆られつつも、あまりの惨状にスケッチブックが白いまま帰る日もあったという。10万人を超す死者、行方不明者を出した大災害。つぶさに写し取った夢二の筆は今も古びてはいない。　2023・9・1

2023年9月1日付　山陽新聞

2023年9月1日は、5年前に亡くなった曾祖母が生きていたら100歳の誕生日、そして、関東大震災から100年の日だ。

私は幼いころから、1923年9月1日は曾祖母が生まれた日、そして大震災があった日と聞いて育ったため、とても大きな地震があったこと、10万人以上の人が震災の犠牲になったことは知っていた。

しかしこの「滴一滴」に私の知らなかったことが三つも書かれていた。一つ目は岡山出身の竹久夢二が東京の渋谷で震災に遭っていたこと。二つ目はおしゃれな美人画の印象が強い夢二だが、震災後は焼け跡を歩き回り、新聞に挿絵付きルポを執筆していたこと。三つ目は、朝鮮半島出身の人たちが暴徒化したとのデマに人々が踊らされていたことだ。

夢二がどのような絵を描き文を記したのか詳しく知りたくなり、特別展示「夢二と関東大震災」開催中の夢二郷土美術館を訪ねた。美人画とは異なる細かい筆遣いで色はなく、荒涼とした風景や途方に暮れる人々が描かれていた。美人画とのギャップと添えられた文面から当時の悲惨な様子が伝わった。最も重い気持ちになったのは朝鮮半島出身の人に扮した友だちを、竹やりで突く自警団ごっこをする子どもたちのイラストだった。

帰宅後、自警団について調べた。震災直後、「朝鮮人が井戸に毒を入れた」「朝鮮人が放火した」などのデマが広まったそうだ。正確にはデマは意図的に捏造されたもので、自然発生したものは流言というらしい。非常事態の不安や恐怖心から少数派の人に向けた流言が生まれたのだ。この流言飛語により、自警団が結成され、竹やりなどで千人から数千人もの人を殺したそうだ。人を殺しても正義と信じている群集心理は恐ろしいと思った。

「当時はインターネットどころか、ラジオもなかったから」と、過去の話にできるだろうか。今はスマホの中にデマや流言に加えフェイクニュースもあふれ、竹やりの代わりにSNSで遠く離れた人でさえ、突き刺すことができる。自分は善良な自警団だと信じて。

100年前に自警団ごっこを見た夢二は、「やめましょう」と新聞で諭した。「流言止于智者（流言は智者に止まる）」という荀子の言葉がある。私も夢二のように「やめましょう」と言える智者でありたい。そのためには、非常時には正しい判断ができにくくなることを認識して、集団に流されない勇気を持ち、常に自分を顧みることが大切だと思った。

寸評

山陽新聞のコラム「滴一滴」を読み、竹久夢二による関東大震災の挿絵付きルポの特別展示に足を運びました。「詳しく知りたい」と思い、行動したことが文章に説得力を与えています。

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。